

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16668

研究課題名(和文) ソ連崩壊後のキルギス共和国におけるコード・スイッチングの実態に関する調査研究

研究課題名(英文) Kyrgyz-Russian Code-Switching in the post-Soviet Kyrgyzstan

研究代表者

小田桐 奈美 (ODAGIRI, NAMI)

関西大学・外国語学部・准教授

研究者番号：50709136

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ソ連崩壊後のキルギス共和国におけるコード・スイッチング(以下CSとする)の実態を明らかにすることである。主にキルギス共和国の首都において、キルギス語とロシア語のCS現象が頻繁に観察されることは、国内外の研究者及び現地メディア、また一般の人々によってもある種の社会現象として指摘されてきたが、これまでその実態は、事実上、学術的に解明されてこなかった。そこで本研究では、キルギス共和国首都ビシュケク市におけるキルギス語とロシア語のCSの実態を、談話データの分析、参与観察等の方法を駆使して多角的な視点から検討し、その特徴、類型、機能等を実証的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、談話データに基づいてキルギス語とロシア語のCSの実態を明らかにする、初めての試みである。近年のCS研究の傾向として、移民コミュニティや国際(異民族間)結婚家庭など、どちらかといえば特定の国・地域における少数派を対象とした研究が盛んであることが指摘できるが、キルギス語とロシア語のCSは、多数派民族であるキルギス人の間で頻繁に観察されることが特徴である。

研究成果の概要(英文)： This study investigates the patterns and features of Kyrgyz-Russian code-switching in Kyrgyzstan, using an analysis of conversational data taken from residents of Bishkek. While the existence of the phenomenon of Kyrgyz-Russian CS has been noted in the sociolinguistics literature on Kyrgyzstan, its analysis has been left wanting.

This is the first attempt to clarify the patterns and features of Kyrgyz-Russian code-switching by using an analysis of conversational data. Kyrgyzstan presents an atypical case of an ethnic majority group practicing code-switching.

研究分野：地域研究、社会言語学

キーワード：キルギス語 ロシア語 コード・スイッチング 旧ソ連諸国

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

筆者による先行研究(小田桐, 2015)では、ソ連崩壊後のキルギス共和国における国家語の実態を、総合的に検討・考察することを目的にした。特に、キルギス社会ではキルギス語化政策は成功していない、そして成功する見通しが無いという、従来の定説に反する言語使用の実態、すなわちロシア語が一定程度維持されながらも、キルギス語化が社会の中で静かに進行している実態を多角的な視点から明らかにし、キルギス語化のメカニズムの解明に成功した。

また、筆者による先行研究の副産物として、キルギス語化という視点だけでは十分に説明することができない、興味深い現象が判明した。それが、一つの会話の中でキルギス語とロシア語を織り交ぜながら併用する現象、すなわちコード・スイッチング(以下 CS とする)である。この CS は、長期に渡る言語接触の結果もたらされたものであり、キルギス語とロシア語が複雑に入り組み、二言語間の境界が必ずしも明確ではないことを示唆する、非常に興味深い現象である。このキルギス語とロシア語の CS に関する研究は、国内外においてソ連時代を含めこれまでほとんど取り組まれておらず、今後その実態とメカニズムを学術的に明らかにしていくことは、早急に取り組むべき課題である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ソ連崩壊後のキルギス共和国における CS の実態を明らかにすることである。主にキルギス共和国の首都において、キルギス語とロシア語の CS 現象が頻繁に観察されることは、国内外の研究者及び現地メディア、また一般の人々によってもある種の社会現象として指摘されてきたが、これまでその実態は、事実上、学術的に解明されてこなかった。そこで本研究では、キルギス共和国首都ビシュケク市におけるキルギス語とロシア語の CS の実態を、談話データの分析、参与観察等の方法を駆使して多角的な視点から検討し、その特徴、類型、機能等を実証的に明らかにする。

具体的には、以下の4つの観点から研究することを当初の目的とした。

【1】CS に関する研究史の整理

CS に関する先行研究に基づき、これまで明らかにされてきた CS の特徴、類型、機能について体系的にまとめると共に、これまでに提起されてきた論点・問題点を整理する。

【2】キルギス共和国における CS の特徴と類型

キルギス語とロシア語の CS の実態を言語学的観点から記述する。

【3】キルギス共和国における CS の機能

キルギス語とロシア語の CS の機能を社会言語学的に考察する。

【4】CS に対する意識、CS と民族アイデンティティ

談話データの分析を通して、キルギス人の CS に対する意識及び CS と民族アイデンティティの関係を明らかにする。

3. 研究の方法

主な研究方法は、談話データの分析である。談話データは、2016年～2017年にかけて、キルギス語とロシア語の二言語空間として知られているビシュケク市において、2人の対話形式で6件(計12名分)収集した。調査協力者は、全員ビシュケク市民である。キルギス語とロシア語の CS は、主に主要民族であるキルギス人の間で頻繁に発生するため、キルギス人のみを対象とした。ペアの選出にあたっては、会話が円滑に進むように、家族や友人、同僚など、すでに信頼関係が構築されていることを重視した。

調査協力者には、筆者が準備した会話トピック例、あるいは協力者自身が好きなトピックに基づき、20～30分の会話をするように依頼した。会話の中では、キルギス語またはロシア語のいずれか、あるいは両方を使って良いことを説明した。

談話データは、キルギス語とロシア語のバイリンガルである現地の研究協力者の助けを得て、全て文字化した。その後、筆者がCS発生部分を中心に見直し、分析用データとして整備した。

談話データの収集に加えて、談話データ録音後のフォローアップ・インタビューの結果も用いた。また、2018年には、過去2年間で収集した2人の対話形式によるデータの弱点を補う目的で、再度ビシュケク市において現地調査を実施した。現地の人々の自然会話におけるキルギス語とロシア語のCSの実例を収集し、フィールド・ノートに記録した。

4. 研究成果

研究期間を通して、結果的に当初の研究目的の2(キルギス共和国におけるCSの特徴と類型)を中心に取り組むことになった。以下では、主にその成果について記述する。

研究目的2に取り組むにあたっては、主に言語学的な観点から、キルギス語とロシア語のCSの特徴とパターン(CSが発生しやすい品詞、ベースになる言語の違いによるCSの発生頻度の差など)を明らかにした。

CSには、1つの文内で発生するもの、あるいは文をまたいで発生するものなど、様々なタイプがあるが、筆者が収集したデータ内では、文内CSが大部分を占めていたため、文内CSを中心に取り上げた。分析にあたっては、文内CSを説明するモデルとして良く知られている、Myers-ScottonのMatrix Language Frame (MLF) モデル(Myers-Scotton, 1997)を用いた。MLFモデルを用いることで、文法的な枠組みを作る「母体言語(matrix language)」と、そこに挿入される「埋め込み言語(embedded language)」を明らかにすることができる。

MLFモデルを用いた分析の結果、文内CSの中でも、キルギス語が母体言語となるケースが大多数であった。そのような傾向は、1つの会話全体を通してキルギス語とロシア語がバランスよく使われている場合においても見られた。

キルギス語が母体言語となるケースにおいては、ロシア語の名詞が挿入されるパターンが最も多く見られ、これは他の言語を対象とした従来のCS研究の結果とも一致する。なかでも頻度が高かったのは、ロシア語の名詞とキルギス語の接尾辞が組み合わせられる例であり、同様の例は、ロシア語の形容詞や動詞が挿入される場合にも観察された。これはまさに、膠着語であるキルギス語と、言語類型的に異なるロシア語とのCSに見られる、特徴的なパターンであるといえよう。

以上の結果については、英文論文として執筆済みで、現在投稿中である(2020年10月に刊行見込み)。なお、当初の研究目的1(CSに関する研究史の整理)と3(キルギス共和国におけるCSの機能)については、部分的に取り組み、その成果については、小田桐(2016)で発表済みである。

本研究は、談話データに基づいてキルギス語とロシア語のCSの実態を明らかにする、初めての試みである。近年のCS研究の傾向として、移民コミュニティや国際(異民族間)結婚家庭など、どちらかといえば特定の国・地域における少数派を対象とした研究が盛んであることが指摘できるが、キルギス語とロシア語のCSは、多数派民族であるキルギス人の間で頻繁に観察されることが特徴である。

引用文献

小田桐奈美(2015)『ポスト・ソヴィエト時代の「国家語」—国家建設期のキルギス共和国にお

ける言語と社会—』関西大学出版部.

小田桐奈美 (2016) 「キルギス語とロシア語のコード・スイッチングに関するパイロット研究」

『関西大学外国語学部紀要』 (15), 関西大学外国語学部, pp.21-32.

Myers-Scotton, C. (1997). *Duelling languages: Grammatical structure in codeswitching*.
Second edition. Oxford: Oxford University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小田桐奈美	4. 巻 15
2. 論文標題 キルギス語とロシア語のコード・スイッチングに関するパイロット研究	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 関西大学外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp.21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小田桐奈美
2. 発表標題 『国家語』推進政策下におけるキルギス語とロシア語のコード・スイッチングの実態
3. 学会等名 日本言語政策学会第18回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----